

獨
步
吟

序

余も亦歌詩を羨みし者の一人なり。明治の世に人となり、例へばバイロンを讀み、ラニンを讀み、シルレルを讀める者にして、其情想、衷に激すれども、これを詠出するに自在の詩體吾國に無きを憾むる者世間必ず其人多かるべしと信ず、余も亦た其一人なりき。

新日本の建立するに當りて全く缺乏せる者は詩歌なりとす。開國以來海外の新思想は潮の如く侵入し來り、我國文明の性質著しく變化を被りしと雖も、遂に一詩歌現はれて此際的情想を詠じ以て、吾人の記憶に存せしめたる者なし。自由の議起り、憲法

制定となり、議會開設となり、其間志士苦難の状況は却て詩歌其者の如くなりしと雖も、而も一編の詩現はれて當時火の如かりし自由の理想を詠出し、永く民心の琴線に觸れしめたる者あらず。「自由」は歐洲に在りて詩人の熱血なりき。日本に移植されては唯だ劇場に於ける壯士演説となり得しのみ。斯くて自由黨は其血を枯らし、其心を失ひ、今や議會に在りてすら清歌高明なる自由の理想を見る能はざるなり。

基督教を始め、歐洲の人心を鼓舞激勵しつゝある雄大の理想、早く已に吾國に入り來りて而も日本には、これが熱情を享け得る程の詩歌を缺きしため我國の新文明は物質的偏長の弊に陥り、世を棄げて唯物主義の淺薄固陋に走り、宗教は墮下せられ徒に電燈のみ輝きて國民靈性の神殿は暗夜の如し。日本に詩歌の發達せる形式なかりしは、新日本の文明を跋足ならしめし大原因の一なりと余は信す。

斯る時、井上外山兩博士等の主唱編輯にかゝる「新體詩抄」出づ。嘲笑は四方より起りき。而も此覺束なき小冊子は草間をくぐりて流るゝ水の如く、何時の間にか山村の校舍にまで普及し、われは官軍わが敵はてふ沒趣味の軍歌すら到る處の小學校生徒をして足並み揃へて高唱せしめき。又た其のグレーの「チャーチャード」の翻譯の如

きは日本に珍らしき清爽高潔なる情想を以てして幾多の少年に吹き込みたり。斯くて文界の長老等が思ひもかけぬ感化を此小冊子が全國の少年に及ぼしたる事は、當時一少年なりし余の如き者ならでは知り難き現象なりとす。夫れ斯の如くなりしと雖も爾來文學界は新體詩なる者を決して歓迎せざりき。こは皆な世人の知る處、文界今尚ほ新體詩を眼中に入れざる輩少からざるを以て知るべし。

されど時は來れり。西南の亂を殘物隨に聞きし小兒も今は堂々たる丈夫となり、其衣兜の右にミルトンあり、左に杜甫あり、懷に西行を入れて、秋高き日、父が上下着て登城したる封建の城、今は葛葛繁れる廢墟の間を徘徊する又た珍しからぬ事となりぬ。而して冷評されつゝも今日まで雜誌類に現はれし新體詩は、何時しか世人の眼に慣れて其詩形も最早奇異ならぬ者となりぬ。

斯くて時は來れり。新體詩は現にも角にも新日本の青年輩が其燃ゆる如き情想を洩らすに唯一の詩體として用からる可き時は徐ろに熟したり。乃ち青年文壇でふ雜誌に新體詩の特に盛んなるは敢て不思議の事にもあらず。

是に於てか余は新體詩が今後我國の文學に及ぼす結果の豫想外に絶大なるべきを信

す。日本の精神的文明の上に著しき影響を與ふるものは今後必ず新體詩なるべきを信ず。此詩體未だ甚だ幼稚なりと雖も新日本はこれに由りて始めて其詩歌を得べくなりぬ。其結果は如何。遺傳に於て吾等は天保老人の血を體中に流し、東洋の情想を胸底に燃やす。學文に於て吾等は歐洲の洗禮を受けたり。吾等が小さき胸には東西の情想、遺傳と教育とに由りて激しく戦ひつゝあり。朝虹を望んでハアズマスを高吟すれども、暮鐘を聞きては西行を哀唱す。神を仰ぎて幽愁に沈む。今や吾等は新體詩を得ていさゝか此舊體をのふるに足りつゝあり。吾等をして縱横に歌はしめよ。斯くて其結果は如何。

あはれ此混沌たる時代と、此煩悶せる青年輩と。此新生の詩體とは相關係して何等の果をも結ばずして止むべきか。

されど此等、凡て年若き者の果敢なき夢想なりとせんか、或は然らん。而も余の如きもの胸には此新體詩の上にかゝる夢想を描き又た描きつゝある事實を如何せん。誰れか此夢想の他日、日本の文明史上に大なる現實となる可きを否定し得るものぞ。願て余は新體詩の主唱者及び今日まで冷評されつゝも堪へ忍びて此詩體を愛育した

る諸君に向つて感謝の意を表する者なり。

余は作詩の上に於て極めて後進なるが故に今日まで成就したる作とても甚だ少く、甚だ少なき中より撰びて茲に掲げ得しは僅に二十編餘に過ぎざるを遺憾とす。しかも唱するに足るものなきを愧づ、たゞこれを以て新體詩のものを罪するなくんば幸なり。

詩體につきは余は甚だ自由なる説を有す。七五、五七の調も可、漢詩直譯體も可、俗歌體も可、漢語を用ゆるの範圍は廣きを主張す。枕詞を用ゆる、場合に由りて大に可、たゞ人をして歌はざるをいざる情態に驅られて歌はしめよ。此の如くなれば、其外形は散文らしく見ゆるも、眼々の中必ず飾あり、調あり、詠嘆ありて自から詩的發言を成し、而も七五の平板調の及び難き遺韻を得余は此確信によりて「山林に自由存す」を歌ひぬ。

吾國には漢詩を直譯的に明吟する習慣あり。七五、五七の流麗なる調の外、自ら吾人の口頭に一種の調を成し居れり。余は此習慣を新體詩の上に利用し發達せしめんとを希望するもの也。此意を以て余は「獨坐」を作りぬ。

新體詩を以て叙事詩を作ることには必ず失敗すべきを信ず。此説に付きては坪内逍遙に言へり。故に初より覺悟して抒情詩の上にも十分の發達を遂げしむるに若かずと信ず。されど彼の叙事的抒情詩の如きは尤も新體詩に適するものゝ如し。湖風子君の「雲雀」は人をして遐想せしめ、太田君の「字之が舟」は茫然として泣かしむ。たゞ余は七五調のみを以て此等の長編を行ふ事、或は平板に流れ易きを恐る。此故に井上博士の「比沼山」を成功致東なきものと余は思ふ。

戀するものをして自由に歌はしめよ。歌うて始めて爾の戀は高品のものとならん。悲戀の士よ。歌へよ。爾の歌こそ尤も悲しかるべし。神を仰ぐものよ。歌へよ。爾の信仰火の如くんば、何ぞ歌して坐し、坐して散文をならぶことを得ん。疑ふものよ。爾の懷疑の煩悶を歌へよ。冷やかに眠る勿れ。貧者よ、爾の詩を以て爾の不平をもらせ。自由に焦るゝ者よ、高歌して憚る勿れ。代議士よ。爾の演説に於ける引證を統計年鑑より採る事をのみ苦心するなく、時には詩歌を用ひて爾の語らんとする真理を飾れ。

嗚呼詩歌なき国民は必ず窮乏す。其血は腐り其涙は濁らん。歌へよ。吾國民、新體

詩は爾のものとなれり。今や余は必ずしも歌詩を羨まず。

明治三十年二月

著

者